



三 夏は夜（西の京の巻 上）

春の、大仏との戦いから三か月が過ぎ、季節は夏を迎えた。観光客等は、昼間の暑さを避け、やはり、夏は夜がいいと、月明かりの下、夜の京都の観光を楽しんでいた。それでも、汗は体中から噴き出す。その汗を首に掛けたタオルで拭き取りながら、一年坂、二年坂、三年坂を登り切ると、清水の舞台から、世間の不条理を少しでも忘れるために、東西南北と縦横無尽に道が整備された条里制の京都の街を眺めるのであった。

その時、「きゃあー」という叫び声とともに、人々はその舞台の上で転げ回ったり、立つことができずにしゃがみ込んだりした。そう、清水の舞台が揺れに揺れ動いたからだ。そして、「京は西だ。京は西だ」と呪文のような声が辺り一面に聞こえてきた。

人々は、ジタバタせずに、また、じたばたできずに、舞台の揺れが収まるのを待ち続けた。ようやく、もう、揺れもないだろうと、一安心すると、ネズミのようにごそごそと動き出した。

その中で、ある高齢の女性は、地震で舞台を支える柱が抜けなくて安心したものの、その代わり、自分の腰が抜けて、地べたに座ったままになっていた。だが、人々が立ち上がりだしたので、自分だけ、このままじっとしてはいられないと、「よいこらしよ、どっこいしよ」と普段以上の大きな掛け声を上げて、立ち上がると、近くにあったベンチに取り合えず座った。

喉がカラカラだ。汗をかいたというよりも、恐怖で体中の鳥肌から水分が蒸発したようだった。ひとまず、落ち着こうと、手提げ袋に水筒を入れたことを思い出した。最近流行のミニボトルだ。量は百二十ミリリットルしか入らないものの、ちよっと持ち歩いて、喉を潤すのにはちょうどよい大きさだし、重さも軽い。そのミニボトルには、自分が作ったよもぎ茶が入っている。そのミニボトルを取り出そうと、手提げ袋の中に突っ込んだ手に何か触れた。動物の毛皮のようだ。それも生温かい。

この夏の暑いときに、毛皮の首巻も、毛皮の手袋も、ましてや、毛皮のコートも持ってきていない。まあ、毛皮のコートは手提げ袋バッグには入らないか。どちらにしろ、毛皮のようなものは持ってきていない。人によっては、車のキーに、キツネのしっぽのような毛皮を付ける人もいるが、運転免許証は持っていないのでそんなことはできない。とにかく、手提げ袋を広げて、この生温かい毛皮のような存在を確かめようとした。

その前に、毛皮の方が先に動いた。女性の指から手の甲、二の腕、肩までと山の稜線の尾根を登るようにつたって来た。その巧みな足さばきは感嘆ものだ。女性は違和感に襲われて、顔を肩に向けて、その動く物体の存在を確認しようとした。だが、正面を向いたその顔を、物体自らが口

や鼻、眉毛などの突起物を頼りに、スポーツクライミングのスピードように垂直の顔の崖を駆け登った。

「きゃあ」と老女はまずは叫んだ。顔を走る存在がまだ確認できなかったからだ。その存在は既に頭の上にいる。髪の毛を通じて、重みが伝わってくる。ゆっくりと手を上げて、その存在を確認し、掴もうとした。だが、その存在は、ダンス、ダンス、ダンスと社交ダンスを踊るように、巧みに、老女の手を摺り抜けていく。その老女の悲鳴を耳にした、近くの子どもが指を差した。

「あっ、ネズミだ」

老女は、子どもが指し示した指が自分に向けられていることを知った。そこで、もう一度、もっと大きな声で、「きゃあ」と叫び、ネズミを頭から振り落とそうと、獅子舞の演舞のように、頭を、髪の毛を振り乱した。

ネズミは振り落とされる前に、女性の頭から地面に飛び降りると、「ちゅん」と一声、鳴いた。その声を聞いて、山の中から、仲間の大群のネズミが現れた。

「ネ、ネ、ネズミの大群だ」

さっきの地震からやっと落ち着いた観光客たちは、その巨大な黒い塊を見て、大声を上げながら、逃げ出した。息をぜいぜいとさせながら、それでも、転ばないように気を付けて登ってきた、一年坂、二年坂、三年坂を、将来の寿命が短くなることよりも、目の前の命が亡くなることを惜しんで、何度も転びながら落ちていく。その後姿をどこまでも大群のネズミたちが追い掛けていく。

「あっ」

群衆とともに逃げ出した老女だが、掛け落ちるスピードに足の筋肉が持たずに転んだ。転んで、寿命が短くなることよりも、目の前のネズミから逃げ出したかったのだ。とにかく、立ち上がらないと。パニックの状況では、人は自分の事が精一杯で、誰も、老女を抱き起そうとはしてくれない。老婆は四つん這いのままだ。

このままネズミに喰われるのか。ネズミの喰われて死ぬなんて嫌だな。でも、立ち上がろうにも、体に力が入らない。もう、このままでもいいのか。ふと、子どもの頃、道に転んで、四つん這いになって、誰かの名を呼び続けたことを思い出した。

こんなところで、子どもの頃のことが頭によぎるなんて。でも、なんだか、ほっとする。一挙に

、時計の針が左回りに急回転し続けた。老女が転んだ目の先の石段の隙間から雑草が一本生えているのが見えた。その雑草は人の靴に付着したり、風で運ばれてきたりした、わずかな土を頼りに、茎を伸ばし、葉を広げ、花を咲かせるなど、生を謳歌しているのだ。

愛おしい。そう、生は愛おしいのだ。そして、自分も、八十歳を超えたこの年になっても、自分の命が愛おしいのだ。雑草を見て、生きる力を得た老女は立ち上がろうとした。「チュン」

泣き声がした。体が強張る。嫌な予感。は、当たるもの。薄くなった髪の毛に重み加わる。先ほどと同じだ。事実を知ることが怖いながらも、確かめすにはられない性格からか、ゆっくりと手を頭の上に伸ばす。何かに触れた。いや、何かに舐められた。

「ぎゃあ」

若い頃なら、きゃあと叫び声も透き通っていたが、年齢を経ると、叫び声までが、濁ってくるらしい。そんなことを思いながらも、恐怖で、今まで曲がっていた腰が伸びた。

咄嗟に立ち上がると、頭の上の何かを振り払い（直接、見なくてもネズミであることは確信していた）、これまでの年齢を取り戻すかのように、三年坂、二年坂、一年坂と若返りながら下っていく。

その緊急の最中でさえ、確か、美味しい和菓子屋さんがあったのに、そこで休憩できないのは、残念坂だ、と、またしても、余計な思念が頭の中に流れ込んでくるのを、その都度、排除しながら逃げていく。その後姿を追っていたネズミが後ろ脚で立ち上がり、何かを誇るように「チュン」と鳴いた。

その頃、三年坂、二年坂、一年坂を始め、網の目状の坂では、老女と同様に、多くの人が坂を転がるように下っていった。

「どけどけ」「私が先よ」「女子供は引っ込んでおけ」「男のくせにだらしない」

など、ネズミからの攻撃よりも人間同士が罵倒しあい、攻撃しあっている。すると、ゴーン、ゴーンと鐘の音が鳴った。その音を聞いて、騒然としていた人々の心が少しは落ち着き、険しい顔が柔和になった。そこに、京都戦隊塔レンジャーの一員である、地レンジャーが現れた。

「あっ、塔レンジャーだ。塔レンジャー。ネズミの大群をやっつけて」

地レンジャーはその声援に応えた。

「我が名は、地レンジャー。ネズミども。この京の都から立ち去れ」

その覇気の声に威圧されたのか、坂道を駆け下りてきたネズミの大群が突然止まった。ネズミたちは、一生懸命、足を動かすものの、歩く歩道を逆走するかのよう、スポーツ施設のランニングマシンを走っているかのよう、前に進めない。

それどころ、反対に、後ろに下がっている。ネズミの足の回転数が増せば増すほど、目の前の道路の坂の角度が上がっていつているのだった。その坂道の角度が三十度、四十五度、六十度、そして、九十度になった瞬間、道路が波のように大きく揺れた。ネズミたちはその波に飲み込まれ、元居た清水寺の舞台の方に押し戻されていた。そして、清水の舞台から次々と奈落の底に落ちていくのであった。

地面に叩きつけられたネズミは二回、三回とバウンドすると、そのまま横たわった。そして、さっきまでの三次元の姿は二次元の姿、そう、紙となった。ネズミたちは紙に描かれた絵だったので。

「おお、なんということだ。私の可愛いネズミたちよ。可哀そうに。お前たちの敵は私がとってやる」

その嘆きと怒りの感情がないまぜとなった声とともに、清水の舞台に巨大な塔が現れた。その塔が声を上げる。

「京を西へ。京を西へ」

倒れて二次元の絵となっていたネズミたちが、その声を聞いて、再び、三次元となって立ち上がり、前足で拍手をする。更に一層、JR西日本からの応援歌のように「京を西へ」の合唱が大きくなった。

「そんなことは、させるものか。トゥー」

地レンジャーがネズミを従える巨大な塔にキックを放った。

「大チュン」

敵の巨大な塔が体の大きさに合わせた、大きな声で倒れた。

「どうだ。京はこの地だ。どこにも移させないぞ」

「何を言うか。長い歴史の間では、戦乱が続き、この地が焼け野原になった時に、京の文化を守ったのは、我らが西の京ぞ。その恩を思い知れ」

この言葉と共に、ネズミたちが一斉に地レンジャーに飛び掛かった。その数、数千、いや、数万、数十万と数えきれないほどであった。

「何だ、こいつら」

地レンジャーは体にまとわりつくネズミを跳ねのけようとするものの、あまりにも数に跳ねのけても跳ねのけても、次から次へとたかってくるので終わりが見えなかった。

「痛い」

地レンジャーが足元を見ると、ネズミたちが自分の足を齧っていた。足を振って振りほどこうとするも、ネズミたちは地レンジャーの足を齧ったまま離れようとしない。そして、ネズミたちは足だけでなく、地レンジャーの体に登るとその全身を噛み始めた。

「ううう」

地レンジャーはあまりの痛みにひざまずく。そのひざまずいた体をネズミたちが襲う。その姿は、遠方から見ると黒山のネズミだかりだった。その傍らで、「般若波羅が見たら、京は西だ。般若波羅が見たら京は西だ」と、まるで家政婦が見せかけだけの上流家庭の真の家族関係を見たかのように、ネズミ使いの塔がお経を唱えていた。

地レンジャーは、頭の中を白い雲に覆われたかのように、意識を失いかけていた。その状態でも、最後の力を振り絞って、俺はここにいるぞ、と自己主張をせんとばかりに、黒山のネズミの大群の壁を突き破って、右手を突き出した。この手は決して、降参する手ではない。人差し指と中指を立て、勝利のVサインを示している、だが、無残にも、そのVサインをした指さえも、ネズミたちが噛みつき、覆おうとしていた。